

大阪学院大学
外国語論集
第82号

Frank Chin *Donald Duk*研究

Donaldの新しいアイデンティティ獲得のプロセス

..... 山 口 修 1

Remarks on Double Objects – a Syntactic Insight

..... 川 上 将 広 25

2021 年 12 月

大阪学院大学外国語学会

大阪学院大学
外国語論集
第82号

2021 年 12 月

大阪学院大学外国語学会

Frank Chin *Donald Duk* 研究 Donald の新しいアイデンティティ獲得のプロセス

山 口 修

序

中国系アメリカ人作家 Frank Chin (1940-) の *Donald Duk* (1991) は、春節の San Francisco のチャイナタウンを舞台に、12歳の少年 Donald Duk が、クーリー（苦力）として過酷な条件下、鉄道建設を進めていった中国人祖先の夢を見るという経験、また、父親やおじ、友人たちとの現実世界での経験を通して、自らのアイデンティティを問い直していくイニシエーション・ストーリーである。

本論では、イニシエーションを「子どもが既存の価値観に対して何らかの揺さぶりをかけられ、価値観の見直しをせまられるような経験をする事」（山口 2014: 2）と定義し、Donald が経験から、自身が理想とする「アメリカ人」像を見直し、どのようなアイデンティティを獲得したのかを、獲得に至るプロセスを中心に考察する。

1

アメリカで中国系移民の家庭に育った Donald は、出自としては「中国人」、一方アメリカ社会からは「中国系アメリカ人」というラベルを付与され、移民の子どもという点で生まれたときから二つの属性を帯びている。彼はこの二重の属性の不自由さから抜けだし、「アメリカ人」になることを望んでいる。Donald は、“Everything Chinese in his life seems to be awful.” (8) と、「中国人」であることを否定的に考えている。この否定的感情はいたると

ここで明らかにされるが、特に家族の面前で発した “Hey, everybody’s gotta give up the old and become American. If all these Chinese were more American, I wouldn’t have all my problems” (42) という言葉では、「アメリカ人」になりきれない彼の苛立ちが露わになっている。この発言を父親は “I think Donald Duk may be the very last American-born Chinese-American boy to believe you have to give up being Chinese to be an American” (42) と揶揄するが、それは Donald の真意をついたものだろう。このように、Donald の中には「中国人」、「中国系アメリカ人」、「アメリカ人」という3つの属性が混在していると思われるが、それぞれの意味を彼は十分に理解できておらず、理解しようとしもない。その結果、彼はまだしっかりしたアイデンティティを確立できないでいる。

ここで Donald のいう「アメリカ人」とは何か考えておきたい。*Writers on America* を論ずる拙論でも見たが、多くの移民の子どもたちが最初に理想とする「アメリカ人」とは、アメリカ映画や漫画で活躍するヒーローであり、いわゆる WASP 的「アメリカ人」像を代表すると考えられているイメージである。² 西山隆行は「坩堝論」において「坩堝」に入るのを認められたのは「ヨーロッパ系のエスニック集団のみ」(21) と述べているが、ここでは WASP という言葉をこのようにアメリカで主流を占める集団と解釈し、アジア系などのマイノリティとは一線を画す集団としておく。Donald が憧れるのは、この集団が主流となり生み出した価値観をベースにした「アメリカ」である。西山はさらに、アメリカ社会の底流にある価値観をトマト・スープに例え、「トマト・スープでは、パセリやセロリなどが風味を増すために加えられることはあっても、いずれはベースのトマトと一体化して原形をとどめなくなってしまう」(21) と述べる。もちろん、トマトだけのスープは味気なく、多様な具材の存在によってスープに深みが出るのだが、Donald はそれに気づかず、父親の発言が示すように、具材の風味さえ否定し、完全にスープに溶け込むこと、具材ではなくトマトになること、を望んでいるかのようである。

Donald はどのような「アメリカ人」像を抱いているのだろうか。彼が憧れるのが、国民的ダンサー Fred Astaire であり、主流のヒーローの一人である。“One day they will look up and see him dancing in one of his old movies. ‘Oh, it’s Fred Astaire!’ they will say. ‘Why, he used to be Chinese from Chinatown. His name was Donald Duk then.’” (45) と Donald が自ら想像するように、ダンサーとしてアメリカ映画に出演し、中国人としてではなく Fred のような「アメリカ人」ダンサーとして見られることを夢見ている。マイノリティに属する Donald にとって、映画の主役になるということが、「アメリカ人」である証だからだ。

夢の中での Fred との次の会話からも、Donald の願望が感じられる。

“[. . .] You know why after all the years they’ve [Chinese have] been here, they’re not more American?” Donald Duk asks.

“More American?”

“American! Like you and me. The kind of people who make American history. The kind of people actors play in American movies.”

“Oh, yes, those kind of people.”

“You know why the Chinese can’t be that kind of people?”

“Why?”

“Passivity.”

“That?”

“Not only that! They’re not competitive. Can’t stand the pressure.” (92)

アメリカの歴史を作るような人、アメリカ映画で「アメリカ人」として演技するような役者が、Donald のなりたい「アメリカ人」であり、中国人としての

アイデンティティを否定し、そのような「アメリカ人」になることに強い憧れを抱いていることが示されている。

Donald が中国性を否定する場面をもう一つ挙げておく。この否定は小説の舞台背景となる春節を嫌っているところにも表れている。

Oh, no! Here comes Chinese New Year again! It is Donald Duk's worst time of year. Here come the stupid questions about funny things Chinese believe in. The funny things Chinese do. The funny things Chinese eat. And, "Where can I buy some Chinese crackers?" (3)

物語中盤で、まさにこの質問を白人男性から受けるが、Donald が耳が不自由なふりをして男の質問を無視する場面がある (82)。他者から中国に関する質問をされること自体を否定するのは、質問されることで、自分が「中国人」であることを否応なく意識させられるからだ。

では、彼のこの否定的中国観はどこから生まれてきたのだろうか。子供の価値観形成には、家庭環境や学校の影響が大きい。まず家庭環境について、父親との関係を中心に論じていく。移民の子どもの特徴として、扉の内側、すなわち家の中では自文化を、扉の外側に一步出るとアメリカを、強く意識させられるという点が挙げられる。Donald もチャイナタウンでの家族との生活では、中国的なものが身近に存在し、その価値観を押しつけられる。元広東オペラの役者で、今はレストランを経営する父親について Donald が "Everything Chinese in his life seems to be awful. His father is awful." (8) と述べるのも、父親から「中国人」であることを強く意識させられるからだ。また、"Only the Chinese are stupid enough to give a kid a stupid name like Donald Duk" (2) といい、"His own name is driving him crazy!" (2) と、自分の名前に関しても父親への不満を示す。

不満の原因である、父親によって名付けられた Donald Duk という名前について見ておこう。Donald Duk はいうまでもなく Walt Disney の漫画に登場する Donald Duck に由来する。³ Donald Duck はアメリカを象徴する存在で、父親がこの名前をつけたのも扉の外側である「アメリカ」社会を意識したからであろう。しかし一方で、Donald が “Looking Chinese is driving him crazy!” (2) というのは、そのアメリカ的名前にもかかわらず（確かにふざけた名前ではあるが）、現状、彼が理想とする「アメリカ」が、見た目が中国人であるため、自分を異質な存在としてしか受け入れてくれないことへの憤りだと考えられる。この発言には、その名が生み出す嘲笑への不満、命名によって中国人としての外見と Donald Duk という名の間にギャップを生み出したことに対する父親への不満が強く表れており、彼の中国嫌いの一因になっている。

父親は模型飛行機を作っているが、全部で百八機ある機体には一機一機に中国の古典『水滸伝』の英雄百八人の絵が描かれており、それらは春節の最後に火をつけて飛ばされることになっている。そこには、中国文化の根底にある「天命」という考え方が反映している。「天命」とは、父親 King の説明では “Nothing is good forever. What goes up will come down. Times change.” (12) ということであるが、Donald はそれを十分に理解できず、その中の一機を夜中に盗み出し燃やしてしまう。この行動には、中国文化に固執する父親への反抗が現れている。

しかし不満が表わされる一方で、父親については、“He is the best cook there [Chinatown].” (8) と、真剣に料理に取り組む父のコックとしての腕を高く評価している。また、夜中に叩き起こされて、街を歩くときいじめられないようにするためのアドバイスを受けたときも、“Donald does not like his dad waking him up like that and yelling him. But what the old man says works.” (4) と父親の助言の正しさを認めている。

このように父 King Duk は、物語を通して扉の内側の世界を代表する存在として中国的な価値観を身を以て Donald に示し続ける役割をもち、Donald の

中国嫌いを助長させる存在である。だが同時に、不満をもたれながらも信頼できる存在でもある。

では、扉の外側、学校はどうか。歴史の教師は授業で次のように語っている。

“The Chinese in America were made passive and nonassertive by centuries of Confucian thought and Zen mysticism. They were totally unprepared for the violently individualistic and democratic Americans. From their first step on American soil to the middle of the twentieth century, the timid, introverted Chinese have been helpless against the relentless victimization by aggressive, highly competitive Americans. [...]” (2)

先の Fred とのやり取りには、この教師の発言がそのまま Donald の考え方に反映している。Donald はこの教師を嫌っているが、中国在住の経験もあり知識の点で自分より優れていると考えているため、彼の発言をそのまま受け入れてしまう。その結果、「天命」についても、Donald は “Chinese are artsy, cutesy and chickendick” (3) と、勝手に解釈してしまう。Donald が教師の影響力を強く受けていることがわかる。

Catherine Gouge は、この場面を次のように説明している。

At the start of Chin’s *Donald Duk*, Donald’s access to history is typically “American.” He knows what he knows about the Chinese primarily from what he has learnt in his American prep school, from American movies, and from what he has seen on American television. (275)

ここで述べられる “American” は、先に見たいわゆる「アメリカ人」であ

り、まさに「アメリカ人」が歴史を学ぶように、歴史を教えられ、その教える側の価値観を Donald は無自覚に自分の考えとして取り込んでいる。Donald が教師の教える内容に不快感をもちつつそれに反論できないのは、Gouge が述べるように、自文化を“self-identify” (276) できていないからだ。そもそも Donald には自文化を理解しようとする意思すら欠如している。

以上見てきたように、Donald は自分の「中国人」としての出自の不自由さに強い不満をもっている。彼の中国嫌いの価値観形成には、Donald Duk という名前、そのように名付けながら中国文化にこだわり続ける父親、さらに、中国人へのステレオタイプな見方を教えている学校教育の影響がある。Donald は、自分の中にある、「中国人」、「中国系アメリカ人」、「アメリカ人」という3つの属性を十分に理解できず、「アメリカ人」教師の語る中国人像を自らの「中国人」、「中国系」の属性として内面化してしまっている。そのため彼は、「アメリカ人」になるには、「中国人」の特性を排することが重要だと考えるのである。

2

次に、Donald が理想とする「アメリカ人」像の見直しを迫られる経験がどのようなものだったのか、現実世界における春節中のチャイナタウンでの経験と、夢の中での大陸横断鉄道建設の経験という二つの経験から考察していく。

春節を迎え、街全体が中国一色に染まる中、Donald の白人の友人 Arnold Azalea が彼の家に数日滞在することになる。Azalea 一家は Arnold だけでなく、両親もまた中国文化に高い関心を持ち、Duk 一家と親しく交流している。読者は、Duk 一家の Arnold やその両親への語りを通して、中国系アメリカ人の日常生活や祝祭期間の生活を知ることができる。⁴

この春節の現実世界で中心となる出来事の一つが、Donald が模型飛行機を燃やすという行為である。彼は、おじにそれを目撃され父親への謝罪を求められた上で、次のような話を聞かされる。

“[...] I know how that snooty private school you go to has pulled the guts out of you and turned you into some kind of engineer of hate for everything Chinese, but your real name is your Chinese name. And your Chinese name is not Duk, but Lee. Lee, just like Lee Kuey. [...]” (23)

自分の態度を客観的に指摘されるとともに、Duk と改名する前の一家の姓が Lee であり、彼が燃やした飛行機に描かれた『水滸伝』の英雄 Lee Kuey (李逵) と姓を同じくするものであることを教えられるのである。この指摘は Donald にとって重大である。なぜなら、Duk という英語名によって Lee という自らの中国人としての出自が覆い隠されていたことに気づかされるからだ。

Donald は毎晩見る大陸横断鉄道の夢を “bad dreams” (23) と呼び、おじにその夢を話す。おじは、曾曾祖父がその鉄道会社で働いていたことを教え、完成記念で撮影された Golden Spike Ceremony の写真について Donald に次のように語る。

“Did you ever wonder why there are no Chinese in that picture? Your great-great-granddaddy and lots of other Chinese were there. So why don’t you find a picture of your great-great-granddaddy there? [...]” (24)

“Look at how young we were when we came to build the railroad. Look at that kid. He’s on foot in the snow, and smiling. He can’t be more than sixteen. Your great-great-granddaddy was even younger than that. More like your age, kid. [...]” (24)

Donald は、“He [Donald] has been there. His feet say so. He recognizes

the snow. It is the first winter the Chinese will spend in the mountains.” (24) と、このとき初めて自分の見ている夢を実体験であるかのような感覚をもって自覚する。そして、彼の視線は自らのアイデンティティ形成の根源たる祖先たちへと向かっていく。

Perhaps Donald Duk is too anxious to get to sleep and dream. The other nights the dreams came, they are all bad because they are all about Chinese he does not understand. Now he wants to dream for a look at his great-great-grandfather. He counts it off on his fingers before his eyes. The father of the father of the father of the father. Great-great-grandfather. Four generations. He is the fifth. Five generations ago. Five Duks or Lees ago, a relative is young and working on the transcontinental railroad, from the west end of the line. “Okay, I’ll tell him [Duk’s father]. Okay. I’ll build it [the model].” (25)

このように曾曾祖父という具体的な家族のイメージをあたえられることで、これまでほとんど認識してこなかった過去の中国人たちが急に現実味を帯びた存在として Donald に意識されるようになる。そして同時に、彼自身、鉄道建設に携わる者たちの中に入り込み、夢の世界を現実であるかのように生きること、当時の労働者たちの行動や考えを具体的な出来事として経験していく。その経験は、現実社会での父親への謝罪、模型の作り直しにもつながっていく。

春節元旦、Duk 一家と Arnold は宴会の買い出しに出かける。元日になぜ店を休まないのかと尋ねる Arnold に Donald の父親は、“The first day is for the close family” (31) といい、おじ Donald が率いる劇団員も家族であり、総勢百人を超える人たちに料理をふるまうつもりであると説明する。中国人にとっていかに家族が大切であるか、その家族の範囲がいかに広いかが強調され

る。春節で賑わう街中での父やおじ、Arnold との会話は、自分が中国文化を中心とした社会の中で生きていることを Donald に強く意識させる。

飛行機のことを謝ろうと厨房に入ってきた Donald に、元役者の父は鷹のような目で調理しながら、主役である関公を演じるには、多くの制約がかかり多大な自制心と忍耐が必要だと淡々と話しかけ、謝罪する息子に

“If he wants to make a model airplane, he doesn’t have to ask me. If he wants to replace the plane he stole, I don’t okay talk. Only action.” (70)

と、謝罪を言葉ではなく態度で表すよう諭す。役を演じるときの心構え、調理する姿勢を示し、それを父親自身が息子の目の前で実践している。自分には厳しく、しかし他人には気前よく寛大にという中国文化を重んじる父親の生き方を直接体験することが、現実世界で Donald が価値観を見直す一つの要因になっている。そういう意味では、父親は、おじ Donald とともに、イニシエーション・ストーリーにおけるメンターとしての役割を果たしている。

一方、夢の世界では鉄道敷設の世界記録を作るという場面が展開する。以下は、土砂降りの中、観客のいるところで記録を作れとせまる経営者 Crocker と現場監督 Kwan との会話である。

“I want our guests to be comfortable when I make the new record.”

“You make the record?” Kuwan shouts. Kwan grabs the hammer out of Doong’s son’s hands and throws it up to Crocker on horseback. “You better be use some of that to break the record, don’t you think?” [...]

“I own the railroad, Kwan. You can’t order me. . .”

“I build a railroad, Ah-Mist. Croker. You do no own nutting me.” (76-77)

このやり取りは、経営者側がいかに理不尽な要求を労働者側にしていたのかを示すと同時に、“made passive and nonassertive” (2) と教師から教えられていたのとは異なる中国人像を明らかにする。

さらに別の晩、Donald は Arnold と二人、一日の鉄道敷設記録達成の日の夢を見る。敷設を鼓舞するのであろう、獅子舞の踊り手の一人として Donald はその現場に立ち会っている。一日に16キロを敷設し記録を打ち立てたとき、彼方から梁山泊の英雄たちが関公を先頭にやってくる。

“Who are they?” Donald asks.

“You don’t know them?” the girl his age asks, full of surprise and a little suspicious. He’s surprised himself. He knows them. He knows them, so why does he ask in his dream?

“I have only heard about them. I don’t know what they look like. I’m from San Francisco, not China.” (115)

Donald はすでに百八人の男たちが何者であるか知っているにもかかわらず、彼らが何者かと近くの少女に問いかけている。それはなぜか。英雄の描かれた飛行機を燃やしたことからわかるように、自分のルーツと認めがたい中国、その古典文学の登場人物としてしか彼らを見てきていない Donald にとって、同胞による偉業達成を祝福するために現れた英雄たちは、彼がそれまで考えていた英雄たちとはまったく異なる存在として意識されたからだ。次の Soong Gong (宋江) の言葉も、Donald に自分の出自の見直しを迫るものだった。

“You have no reason to remember anyone as ignorant and

without skills as myself. But you would do me a great honor if when the world turns harsh against the honest and incorruptible, you look me up before you sell out. [...]” (116)

その直後、Donald は現場監督の Kwan から、最後の枕木に他の中国人たちと同じように自分の名前を書き込むようにいわれる。しかし、Donald は “He does not know what to say, or what he wants to say.” (117) と戸惑い、“Are you ashamed of laying The World Record, boy?” (117) と Kwan にいわれ、筆を取ったところで、姉たちに起こされ夢から覚める。

Donald のこの戸惑いは何だろうか。記録達成現場にはいたが彼はずっと工事に携わっていたわけではない。また現実世界では、そのような過酷な条件下、困難な作業を強いられていた中国人たちがいたということも知らなかった。アメリカの歴史を作りたいといいながら、過去の歴史的事実を知ろうとしなかった。これまで自分の中国性を否定し続け、祖先たちの過去の労苦に思いを寄せることもなく、祖先たちから現代へと通じる共通の英雄たちへの関心もなかった。そういった自文化への無知に対する疚しさがあったからではないか。

Donald が自文化を知らないことに気づかされるエピソードは他にもある。ある朝、本屋でカードに描かれた Soong Gong を見つけ、これは誰かと店員に尋ねる。“Where are you from, boy?’ the woman asks. ‘You a Chinatown kid?’” (120) という店員の反応は、Donald が Soong Gong を知らないことに驚き呆れている様子が見て取れる。

また、Arnold と図書館で鉄道建設時の本を見て、そこに白人の名前だけが掲載され中国人の名前が一人も出ていないことに気づく場面も自分の無知を自覚させるものだった。家で父親にそのことを話すと、父親は次のようにいう。

“They don’t want our names in their history books. So what?

You're surprised. If we don't write our history, why should they, huh?"

"It's not fair."

"Fair? What's fair? History is war, not sport! You think if you are a real good boy for them, do what they do, like what they like, get good grades in their schools, they will take care of you forever? Do you believe that? You're dreaming, boy. That is faith, sincere belief in the goodness of others and none of your own. That's mysticism. [...] You gotta keep the history yourself or lose it forever, boy. That's the mandate of heaven." (123)

これらの言葉は、Donald に「アメリカ」に住む中国系の立ち位置を、より明確に自覚させた。そして、以前も父親から教えられていたにもかかわらず、「天命」が、自分の解釈である “Chinese are artsy, cutesy and chickendick” (3) とは違うものであることを実感する。

このような経験を通して、中国嫌いという彼の価値観は徐々に変化し、Donald の見た夢の終わりに近い場面では、さらに彼に価値観の見直しを迫る。中国人の名前の書かれた枕木を使用することを拒絶した自分への中国人たちの抗議を恐れて、Crocker は次のようにいう。

"[...] The Last Spike will be hammered home, the telegram sent, our photograph made to preserve a great moment in our nation's history, without the Chinese. Admire and respect them as I do, I will show them who built the railroad. White men. White dreams. White brains and white brawn." (131)

白人の優位性が強調され、Donald がこれまで考えていた「アメリカ人」の本

質に疑念が生じる。また、図書館から借りた本に掲載されていた、鉄道がつながった日に撮影された写真に、中国人が写っていないことを再確認したことで、Donald は白人対中国人という関係を強く意識するようになる。

こうして自らのアイデンティティについて深く考える契機が与えられ、Donald は自らの価値観を見直し始めるが、それが Arnold との間に軋轢を生む。Donald と Arnold が Duk 一家と一緒に鉄道完成日の写真を見ている場面である。

“See, there were soldiers to keep us out of the picture. Don’t you think we belong in this picture more than any of these white men?”

“I’m white,” Arnold Azalea says.

“You’re white, but you are not white like these guys. I like you. I don’t care what you are.”

“I care what you are.”

“What am I?”

“Are we fighting? Why?” Arnold asks. “I thought we were on the same side.”

“That’s what I thought too.” (133)

ここには異人種に対してどう接するかということに対する Donald と Arnold の考えの違いがはっきり示されている。自らを「アメリカ人」と考える Donald は、その前提として Arnold を同類として考えている。だから白人であつても「気にしない」のである。一方、Arnold は両者が同類ではないことを前提にしているのではないか。同じ夢を見、中国人の置かれた立場がどのようなものであるかを理解しているからこそ、彼は “we were on the same side” と Donald と同じ側に立っていると素直に語ることができる。しかし、Arnold は自分が中国人でないことを自覚している。だから、中国を知ろうと

し、中国人である Donald の立場を「気にする」のである。しかし、その Arnold の考え方を Donald は理解できていない。それゆえ、彼の元を去った Arnold に対して夜の街を見ながら “Gone with the tourists. Arnold will be gone by now too. Another tourist.” (135) と呟き、中国文化に深い理解を示す白人の友人であった Arnold に失望してしまうのである。この出来事もまた Donald に自分の中国性を意識させる契機となる。

その夜更け、慈善で米を配る父親やおじの姿を見つけた Donald がなぜこんなことをするのか尋ねると、父親は “Tradition.” と答え、おじが “It’s everybody’s birthday, today. The sixth day of the first month of the new year.” (137) と説明を加える。ここでもまた中国の伝統を経験することになった Donald は、父に自分の夢の話始める。

“Everything I dream is true. Or was true. I dreamed we set a world’s record, and it’s true. [. ..]”

“We?”

“The Chinese. The Chinamans who built the railroad. I dream I’m laying track with them when I sleep, and nobody knows what we did. Nobody, just me. And I don’t want to be the only one who knows, and it makes me mad to be the only one who knows, and everything I dream makes me mad at white people and hate them. They lie about us all the time.”

“No, don’t hate all the white people. Just the liars,” Dad says. (138)

“But you know truth. The truth came looking for you in the dreams. You go look for the truth in the library. You know what is true. [. . .] That makes your life hard, kid. You have the choice. If you

say Chinese are ching chong, you have to choose to do it and lie about what you know is true. And you remember one thing too: Soong Gong, the Timely Rain, came to you in your dreams and asked you to go to his hideout and join his heroes. Boys and girls don't dream like that over here. You must be something special. Maybe. (139)

父親は Donald に、中国人を馬鹿にし嘘をつき続けるのか、それとも中国人としての自覚をもち真実を語るのか選択を迫る。Donald はこの問いかけに直接答えてはいない。しかしその直後、夜食を食べながら、“Why do you call them [doughnuts known as *demons boiled in oil*] *yow jow gwai*” と質問し、“Please, please, I'm listening this time. I really want to know. I'm not faking.” (141) と父親に答えを懇願しているところから、明らかに扉の内側、自文化への関心が高まっていることがわかる。また、Donald 自身はつきり気づいていないが、自分を含む “we” という人称代名詞の使用は、Donald が中国人の一員になったことを示している。

学校では、教師が中国人たちは他の移民と異なり開拓者の意思をもたず “*sojourners*” (150) と呼ばれ、鉄道建設従事者たちは “*Crocker's Pets*” (151) と呼ばれていたと教え、再び “Their passive philosophy and noncompetitive nature rendered them ripe for exploitation and victimization.” (151) と、中国人へのステレオタイプな見方を話し始める。その内容に、Donald は “You are incorrect, sir” (151) と大きな声を上げ、“You are . . . sir, Mr. Meanwright, not correct about us being passive, noncompetitive.” (151) といって、冬の厳しい Sierras でのトンネル工事、未払い賃金へのストライキ、線路敷設の世界記録など、教師が教える消極的中国人像を覆す史実に基づいた中国人の行動を挙げ、“And it is badly informed people like you who keep us out of that picture there.” (151) と反論する。その時、Arnold もまた “That's right. Mr. Duk is correct, Mr. Meanwright. We checked the books out of the

library, and here they are.” (152) と Donald を援護する発言をする。その勢いに、教師は “Gentlemen, boys, you have caught me completely unprepared for . . .” (152) と答えるしかない。

この一連の出来事は、学校教育が Donald の考え方に大きな影響を与えていたこと、教師のいうことが全て正しいわけではないこと、つまり先に見た “Donald’s access to history is typically ‘American.’” (275) という事実に気づかせると同時に、Donald に自分が中国人であることを “self-identify” (276) させたといっているだろう。さらに、中国人もまたアメリカの歴史の作り手であるという認識も得たのではないだろうか。

Azalea 一家との席上、Donald の父親 King と Arnold の父親が模型飛行機の話をし、Arnold の父親は模型飛行機について “It is too fragile not to destroy. To see it burn up in midair or explode in flight—that is how an airplane should die. In flight. In its medium, so to speak.” (157) と、自らも飛行機を燃やしていたことを話す。これは、King の “Times change.” (12) という「天命」の説明と共通するものがある。この場面は、白人、中国人といった人種を越え、共感できるものが存在することを示しているように思われる。

その席で父 King に、自分のよき理解者である Arnold と仲直りするよう促され、Donald は Arnold と和解する。この和解は、次の会話に示されるように Arnold が中国文化を深く理解しているからこそ彼を信頼できるのだと Donald が自覚することによってもたらされている。

“I bet we’re the first kids to make Mr. Meanwright read books, huh?”

“Can you believe it? He never even heard of Kwan Kung before.”

“The god of war, plunder, literature . . .”

“Yeah, the god of fighters, blighters and writers.”

“Wow, what a great day it’s been, huh, Donald?” (159)

同じ白人であっても、中国文化を表面的にしか理解していない教師に比べ、中国文化のよき理解者である Arnold が自分にとって大きな存在であることを Donald は理解したに違いない。物語の最後の方で Donald と Arnold が龍の一部となって街中をパレードするシーンは、二人が人種を超えて一体感を体験していることを象徴しているようである。⁵

以上見てきたように、Donald は夢の中で大陸横断鉄道建設という出来事を自ら体験する中で、授業では教えられない多くの歴史的真相を発見し、アメリカ建国の担い手として、中国人の果たした役割も大きかったことを知る。その体験は、春節で賑わう現実世界で彼に自分の中国人としてのアイデンティティを再確認させる契機となった。それは、父親やおじたちによって示されてきた中国的価値観を彼らと共有することでもある。白人の側の視点で語られる中国人像に対し、Gouge が “his inability to recognize such inaccuracies (to tell what is ‘fake’ from what is ‘real’)” (275-6) と指摘していた当初の能力欠如の状態から、“fake” を見極め、それに反論し、自文化を正しく主張することができる能力を獲得したといつてよい。また、自文化の価値を理解するには、Arnold のような自文化を理解しようとするよき他者、理解者の存在もまた不可欠であることがわかったのではないだろうか。

結論

「中国人」、「中国系アメリカ人」というアイデンティティを確立できない Donald にとって、「アメリカ人」になるためには、その中国性を否定しなくてはならなかった。Donald は父親を始め多くの中国系の人たちが中国性にこだわり続けるために、中国系アメリカ人たちは本物の「アメリカ人」になれないと考えていた。その価値観の形成には、学校で習った中国人に対する

“Passivity”、“not competitive” (92) といった評価が大きく影響している。また Fred Astaire に象徴される、メディアによって作られた「アメリカ人」像も、彼の理想とする「アメリカ人」という価値観の根幹にある。しかし、彼はそれらを相対化して見ることができず無批判に受け入れ、その像を自らのなるべき姿と想像し、自分と同じ考えができずに中国文化にこだわる同胞を批判していた。

彼の「アメリカ人」像を見直すのに大きな影響があったのが、大陸横断鉄道建設の夢だ。夢の中ではあるがそこでの苦難を自ら経験し、授業で教えられた消極的で競争心がないために搾取されてきたという中国人像が一面的な見方であり、史実とは異なることを Donald は理解する。中国人がアメリカ建国に一役買っていた事実から、「中国系アメリカ人」もアメリカを構成する存在であることを自覚したにちがいない。

これらの経験は Donald の現実世界の受容の仕方に影響を与え、春節中、父親やおじたちから教えられる中国文化への関心を高める。その意味を深く理解し、あらためて自分の中国人としての属性に Donald は目を向け始める。父親 King が中華料理という独自の「具材」で多くのアメリカ人たちを喜ばせ、アメリカの食生活を豊かにし、トマトではなく「中国人」という「具材」としてスープに彩りを添える役割を果たしていることに気づき、Donald はアメリカを構成する人種のもつ多様な役割、独自性に気づいたのではないかと。また、そこには自文化のよき理解者が不可欠であることも自覚する。Donald と Arnold が龍の一部となりパレードするシーンは、二つの人種が一つの龍を作り上げている点で、アメリカを象徴している。

こうしたプロセスを経て、Donald はこれまで自分が抱いていた「アメリカ人」像が一面的なものであることを自覚し、自分のルーツ、文化を深く問い直すことで、これまでとは異なる「中国系アメリカ人」としての自らのアイデンティティを構築するにいたるのである。

注

- 1 イニシエーション・ストーリーについては、拙論「“The Island of Doctor Death and Other Stories” 研究－永遠のイノセンスへの試み」『大阪学院大学外国語論集』第67号（2014）を参照。
- 2 拙論「*Writers on America*に見るアメリカの理念と作家の役割」『大阪学院大学外国語論集』第76号（2018）を参照。
- 3 ドルフマンとマトゥラルは、Donald Duck を中心に Disney 作品を文化帝国主義的な視点から論じ、Disney が『米国的生活様式』の宣伝係（171）であると指摘し、「真の脅威は、彼が米国的な生活様式（American way of life）のスポークスマンであることにではなく、彼が米国的な生活の夢（American dream of life）を代表していることにある」（171）と述べている。この視点は、「アジア系アメリカ文学」という言葉を初めて定義づけたアンソロジーの編者の一人である Frank Chin の、白人文化とは一線を画す姿勢と共通する面が見られる。Donald Duk という名前には、そのような意図も込められているかもしれない。
- 4 本論から少しずれるが、これは読者に中国文化を伝えるための手段であり、*Writers on America* の作家たち同様、中国系作家として自文化を広く認識してもらいたいという作者 Chin の意図が感じられる。李有成によると、Chin は、「中華系アメリカ人とは結局のところステレオタイプの産物」（106）と考え、それを多くの人に自覚させようとしていたようである。次のインタビューからは、Chin が中国系も含め、広く自文化を知って欲しいと考えていることがわかる。

Everyone is saying, “Gee, I hate Chinatown. I’m not typical of Chinese at all. I want to get out.” But they don’t say what Chinatown is good for, or what the people who live in Chinatown and like Chinatown, like about it. And so I said, “Hey, there’s a

big hole there. Let me fill that hole.” (チン 23)

また、植木照代は Chin をはじめ中国系アメリカ人作家の創作活動について、「[……] オリエンタリズム的言説の呪縛から自らを解放し、同時に自身の生まれ育ったルーツとの関係を測り直し、外社会に向けて飛翔するための必要不可欠な作業であったと考えられる」(xix) と述べているが、やはり、この作品が自世界の内と外に向けて発信されていることを示唆する。

- 5 この場面について、李有成は、「白人の人種差別を嫌というほど受けた中華系アメリカ人のような民族的マイノリティにとって、ドナルドの夢が表象する過去—白人が打ち負かされ、中国人が勝利する—というのは確かに美しく輝かしい過去である。ドナルドは夢を通してその民族の記憶を再構築するとともに、啓蒙儀式を行っており、祝賀活動の中で獅子舞を踊る役目を仰せつかっている」(111) と述べ、白人に対する中国人の勝利を示すという捉え方をしている。

引用文献

Chin, Frank. *Donald Duk*. Minneapolis: Coffee House Press, 1991.

Gouge, Catherine. “The ‘Glorious National Problem’: Frontierism and Citizenship in Frank Chin’s *Donald Duk*.” *The Journal of American Culture*, 31:3, 2008. <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/epdf/10.1111/j.1542-734X.2008.00675.x/> Accessed 25 Nov. 2021.

植木照代監修 『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』 世界思想社 2011年

チン、フランク “I See Asian Culture, Asian Civilization in America Threatened.” 『時事英語研究』 2月号 研究社 1994年

ドルフマン、A. マトゥラル、A. 『ドナルド・ダックを読む』 山崎カヲル

訳 晶文社 1999年

西山隆行 『移民大国アメリカ』ちくま新書 2016年

山口修 「“The Island of Doctor Death and Other Stories” 研究－永遠のイ
ノセンスへの試み」『大阪学院大学外国語論集』第67号 2014年

— 「*Writers on America* に見るアメリカの理念と作家の役割」『大阪学院大学
外国語論集』第76号 2018年

李有成 「フランク・チンと中華系アメリカ文学」『中国21』42 羽田朝子訳
東方書店 2015年

A Study of Frank Chin's *Donald Duk*: A Process of Acquiring Donald's New Identity

Osamu Yamaguchi

This paper shows that Frank Chin's *Donald Duk* is an initiation story of the main character, Donald Duk, and clarifies the process of how Donald changes his old idea of his identity, and acquires a new identity as a Chinese American.

Donald Duk is a story of a Chinese American boy, Donald Duk, who wants to be not a Chinese American, but an "American." Donald lives in Chinatown in San Francisco, but he denies his Chinese identity and the Chinese culture to which he belongs. He cannot stand that people around him are satisfied with being Chinese Americans. He wants to be an "American," but this means an "American" who has mainstream American cultural values, so called WASP values.

During Chinese New Year, he dreams about building a transcontinental railroad every night with his white friend, Arnold. Donald appears in this dream, and experiences what his Chinese ancestors who worked as laborers did when they built the railroad in the 1860's. In this dream, he finds that the Chinese were not passive and nonassertive, as his teacher had taught him in class. Further, he discovers the fact that in a photograph after the completion ceremony of the railroad, there were no Chinese men, and that there were no Chinese names recorded in books about the railroad. Through this experience in his dream and experiences

with his father, his uncle, and his friend Arnold in Chinatown, Donald changes his images about the type of “American” who he wants to be and accepts to live as the Chinese American that his father wants him to be, and acquires a new sense of values about his identity as Chinese.

Remarks on Double Objects — a Syntactic Insight¹

Masahiro Kawakami

1. Introduction

Double object constructions (DOCs) and their alternative, prepositional dative constructions (PDCs), in English show some similarities in terms of their syntactic fashion. Specifically, both constructions have two objects. In DOCs such as example (1), the verb *give* takes two objects, the Goal noun phrase (NP) *Mary* and the Theme NP *a book*, as its complements.

(1) John gave Mary a book. (Double Object Construction)

Alternatively, both objects in (1) are reversed in PDCs, but the complements are the same, as seen in example (2).

(2) John gave a book to Mary. (Prepositional Dative Construction)

In terms of DOCs, Barss and Lasnik (1986) points out that the Theme NP, which is the second object, occupies the binding domain of the Goal NP, which is the first object; however, not vice versa. For instance, the R-expression *John* is available as an antecedent of the anaphor *himself* in (3). This clearly indicates that the Theme NP *himself* is inside of the

binding domain of the Goal NP *John*.²

(3) I showed John_i himself_i (in the mirror). (Barss and Lasnik 1986)

In (4), however, the Goal NP seems to be outside of the binding domain of the Theme NP, as the anaphor binding effect fails.

(4) *I showed himself_i John_i (in the mirror). (Barss and Lasnik 1986)

This asymmetry in (3) and (4) is also grammatically parallel to PDCs. Below, (5) and (6) claim that the first object is structurally higher than the second object, but not vice versa.

(5) I showed John_i to himself_i (in the mirror).

(6) *I showed himself_i to John_i (in the mirror).

Based on these views, a variety of possible analyses of DOCs and PDCs have been advanced by Larson (1988), Aoun and Li (1989), Fujita (1996), Takano (1998), and Oba (2005), among others. Moreover, Kayne (1984), Horstein (1995), Harley (1995, 2002), and Harley and Jung (2015) claim that the objects in DOCs form a small clause³.

In light of these backgrounds, this study aims to propose an alternative analysis for DOCs and PDCs. We also examine this analysis using some empirical phenomena observed in DOCs and PDCs. The remainder of this article is organized as follows. Section 2 presents our theoretical assumptions and proposals. Section 3 examines the arguments using some empirical data that consists of backward anaphor binding,

scope freezing, and pseudo-gapping. Section 4 summarizes this article and indicates directions for further research.

2. Proposals

This section presents an overt object-raising analysis for both DOCs and PDCs. First, note that this article follows *the Uniformity of the Theta Assignment Hypothesis (UTAH)*, advanced by Baker (1988). This work claims that every structure that consists of identical theta-role assigned arguments has an identical original structure, the D-structure, which is within the framework of *the Lectures on Government and Binding*, developed by Chomsky (1981). This is defined in (7) below.

(7) *The Uniformity of the Theta Assignment Hypothesis*

Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items at the level of D-structure.

(Baker 1988:46)

In a more current fashion of syntax, this article assumes that *UTAH* is updated as in (8), as *the Minimalist Program* established by Chomsky (1992), in which the notion of “D-structure” has been theoretically eliminated.

(8) *Uniformity of Theta-Role Assignment Hypothesis* (updated)

Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items **at the merge level**.

Considering the updated *UTAH*, we first consider DOCs. First, this article proposes that Agr^oP, which is a functional projection for Case-

checking for objects, developed by Chomsky (1992) and Koizumi (1993, 1995), is assumed. In addition, this projection is structurally sandwiched between verb phrase (VP) shells, which is first proposed by Larson (1988). The Goal NP *Mary* occupies [spec-VP]. In contrast, the Theme NP *a book* is at the end of the structure.⁴ The Agent NP merges in [spec-vP]. Below, (9) demonstrates how each argument, *John*, *Mary*, and *a book*, merges.

(9) [_{VP} [_{NP} John] [_{v'} [_v] [_{Agr^oP} [_{Agr^o'} [_{Agr^o}] [_{VP} [_{NP} Mary] [_{v'} [_v give] [_{NP} a book]]]]]]]]].

The derivations of (9) are as follows. First, the Goal NP *Mary* is obligatorily attracted to [spec-Agr^oP], as the Goal NP must have its Case checked, as shown in (10).

(10) [_{VP} [_{NP} John] [_{v'} [_v] [_{Agr^oP} [_{NP} Mary_i][_{Agr^o'} [_{Agr^o}] [_{VP} [_{NP} t_i] [_{v'} [_v give] [_{NP} a book]]]]]]]]].

Second, the verb *give* is also triggered to move to [vP-head] via [Agr^oP-head], following head movement, as in (11).

(11) [_{VP} [_{NP} John] [_{v'} [_v give_j] [_{Agr^oP} [_{NP} Mary_i][_{Agr^o'} [_{Agr^o} t_j] [_{VP} [_{NP} t_i] [_{v'} [_v t_j] [_{NP} a book]]]]]]]]].⁵

However, in PDCs, the Goal prepositional phrase (PP) *to Mary* occupies [spec-VP], instead of the Goal NP. The Agr^oP sandwiched between the VP-shells and the lowest Theme NP *a book* is parallel to that of DOCs. Based on the *UTAH* principle, each identical theta-role assigned item, the Agent NP, the Goal NP and the Theme NP, clearly represents the

identical insight of the structure between DOCs and PDCs. This is represented in (12) below.

(12) [_{VP} [_{NP} John] [_{v'} [_v] [_{AgroP} [_{Agro'} [_{Agro}] [_{VP} [_{PP} to Mary] [_{v'} [_v give] [_{NP} a book]]]]]]].

Unlike in DOCs, the item that is attracted to [spec-Agr^oP] is the Theme NP *a book*. The reason Agr^o prefers the Theme NP to the NP *Mary* or the Goal PP *to Mary* is that the Case of the NP *Mary*, which is inside of the Goal PP, has been checked by a preposition *to*.⁶ Further, PP itself does not need to be checked, as only NP without Case violates *the Case Filter*, which states that every overt NP must be assigned a Case (Chomsky 1981). These are structurally represented in (13).

(13) [_{VP} [_{NP} John] [_{v'} [_v] [_{AgroP} [_{NP} a book_i]_{[Agro'} [_{Agro}] [_{VP} [_{PP} to Mary] [_{v'} [_v give] [_{NP} *t_i*]]]]]]].

As is similar in DOCs, the verb *give* moves to [vP-head] via [Agr^oP-head] by head movement.

(14) [_{VP} [_{NP} John] [_{v'} [_v give] [_{AgroP} [_{NP} a book_i]_{[Agro'} [_{Agro} *t_j*] [_{VP} [_{PP} to Mary] [_{v'} [_v *t_j*] [_{NP} *t_i*]]]]]]].

Considering these arguments, each structure exhibits the syntactic fashion that the first object asymmetrically c-commands the second; therefore, the anaphor binding effect reported by Barss and Lasnik (1986), as seen in (3) and (4), is obviously without any problems, similar to what is seen in (10)

and (11). Furthermore, the asymmetrical binding in PDCs seen in (5) and (6) are, according to this analysis, clearly expected in (13) and (14) as well. This article calls this an object-raising analysis. This article also points out that all movements contained in (10)-(14) are obligatory, triggered by each driving force. This respects “economy principle” within the framework of *the Minimalist Program*, which abandons any optional transformations.

In summary, both DOCs and PDCs involve obligatory object-raising to the specific Case-checking position [spec-Agr^oP]. Further, each phrase in both constructions follows the updated *UTAH* approach. In the object-raising analysis, the aim of object-raising causes some differences in their surface approach. In the next section, we aim to enhance the empirical suitability of this analysis.

3. Discussions

3.1 Backward Anaphor Binding

As mentioned in the previous section, the data of an anaphor binding in (3)-(6) clearly shows that the first object asymmetrically c-commands the second object, in DOCs and in PDCs. Fujita (1996), however, discusses the outstanding data; that an anaphor takes its antecedent backwardly if the anaphor is embedded by a larger NP⁷ in PDCs, as shown in (15).

(15) ?John introduced each other_i's friends to Bill and Mary_i.⁸ (Fujita 1996)

This is rarely possible in DOCs, even if an anaphor is involved.

- (16) *John introduced each other_i's friends Bill and Mary_i. (Fujita 1996)

Given (15) and (16), this article assumes that any traces in a sentence are available to satisfy *Condition A* of *Binding Theory*.

(17) *Binding Theory*

- (A) An anaphor is bound in its governing category.
 (B) A pronominal is free in its governing category.
 (C) An R-expression is free. (Chomsky 1981:188)

Note that, in view of the assumption here, once an anaphor satisfies *Condition A* at any stage of derivations, an anaphor is successfully licensed, even if an anaphor appears backward in a surface sentence.

In light of this, we first consider DOCs. The Goal NP *each other's friends* is in [spec-VP], and the Theme NP *Bill and Mary* is at the end of the structure. In (18), without any movements, the Goal NP *each other's friends* is out of the binding domain of the Theme NP *Bill and Mary*; thus, *Condition A* is not satisfied at this stage.

- (18) [_{VP} [_{NP} John] [_{v'} [_v] [_{AgroP} [_{Agro'} [_{Agro}] [_{VP} [_{NP} each other's friends] [_{v'} [_v introduce] [_{NP} Bill and Mary]]]]]]].

Following the derivation, the Goal NP moves to [spec-Agr^oP] for its Case.

- (19) [_{VP} [_{NP} John] [_{v'} [_v] [_{AgroP} [_{NP} each other's friends_i]_i] [_{Agro'} [_{Agro}] [_{VP} [_{NP} *t*_i] [_{v'} [_v introduce] [_{NP} Bill and Mary]]]]]]].

Given object-raising in (19), neither the structural hierarchy of the Goal NP *each other's friends* nor the Theme NP *Bill and Mary* is ever changed. Because of this, the Goal NP *each other's friends* is never licensed; thus, the backward anaphor binding effect in DOCs like (16) is not allowed.

PDCs before any movements apply are nearly parallel to DOCs'. The Theme NP *each other's friends* is asymmetrically c-commanded by certain items in this structure. At this stage, *Condition A* is successfully satisfied, because the potential antecedent *Bill and Mary* in [spec-Agr^oP] c-commands the anaphor *each other*, as depicted in (20).⁹

(20) [_{VP} [_{NP} John] [_{v'} [_v] [_{AgroP} [_{Agro'} [_{Agro}] [_{VP} [_{PP} to Bill and Mary] [_{v'} [_v introduce] [_{NP} each other's friends]]]]]]].

In PDCs, the Theme NP *each other's friends* rather than the Goal PP *to Bill and Mary* moves to [spec-Agr^oP] for Case reasons. This is described in (21) below.

(21) [_{VP} [_{NP} John] [_{v'} [_v] [_{AgroP} [_{NP} each other's friends_i]_{[Agro'} [_{Agro}] [_{VP} [_{PP} to Bill and Mary] [_{v'} [_v introduce] [_{NP} *t_i*]]]]]]].

Given the *anywhere* theory of *Condition A*, an antecedent and an anaphor appearing backwardly in a surface sentence is not a problem, as *Condition A* has been licensed at the stage of (20).

In summary, this section contends that the Goal NP/PP and the Theme NP in DOCs and PDCs occupy parallel position in the *UTAH* approach. Considering this view, Agr^o attracts the closest NP that does not have its Case checked; these attracted items are distinct in both

constructions. Specifically, the target of attraction of Agr^o is the Goal NP in DOCs and the Theme NP in PDCs. As a result, this distinction allows for backward binding effects in PDCs, but not in in DOCs.

3.2 Scope Freezing

Following the standard view of scope relations in English, May (1985) establishes that a variety of quantifiers in a sentence exhibits ambiguity in terms of its interpretation. For instance, (22), which includes multiple quantifiers *someone* and *everyone*, has two interpretations, as illustrated in (23).

(22) Someone loves everyone.

(23) a. some > every
b. every > some

May (1985) also suggests the following definition as a principle for how a quantifier in a sentence takes scope over the other.

(24) *Scope Principle*

For any occurrence of operators O_i and O_j where O_i c-commands O_j and O_j c-commands O_i , O_i and O_j are free to take on any relative scope relation.

(May 1985)

Considering (24), the judgement that exhibits a scope ambiguity is due to a c-command relation between the quantifiers in a sentence. May's definition of c-command¹⁰ is provided in (25).

(25) A c-commands B iff every node that strongly dominates A strongly dominates B.

According to these views, the scope ambiguity in (23) is accountable, in that both quantifiers *someone* and *everyone* in (23) mutually c-command each other at some stages of its derivation.

Next, we examine DOCs and PDCs. First, PDCs exhibit scope ambiguity between the objects, as shown in (26).

(26) John gave a book to everyone. (a > every, every > a)

In May's (1985) analysis, the sentential ambiguity in (26) demonstrates the fact that the Theme NP *a book* c-commands the Goal PP *to everyone*; moreover, the Goal PP/NP c-commands the Theme NP. Given the object-raising analysis, the Theme NP *a book* is originally merged with the verb *give* at the end of the structure. Note that, at this stage, it is enough for the Goal PP *to everyone* to c-command the Theme NP *a book*; therefore, the interpretation *every > a* has been licensed, as depicted in (27).

(27) [_{VP} [_{NP} John] [_{v'} [_v] [_{AgroP} [_{Agro'} [_{Agro}] [_{VP} [_{PP} to everyone] [_{v'} [_v give] [_{NP} a book]]]]]]]]].

Furthermore, the Theme NP *a book* rather than the Goal PP *to everyone* moves to [spec-Agr^o P] for Case reasons. Given object-raising, the Theme NP *a book* is structurally high enough to c-command the Goal PP *to everyone*; this generates the other interpretation *a > every*, which is represented in (28).

(28) [_{VP} [_{NP} John] [_{v'} [_v] [_{AgroP} [_{NP} a book_i]_{[Agro'} [_{Agro}] [_{VP} [_{PP} to everyone] [_{v'} [_v give] [_{NP} *t_i*]]]]]]].

As a result of (27) and (28), PDCs like (26) exhibit two possible interpretations.

In contrast, DOCs show a rigid scope relation, which refers to its surface the [Goal NP- Theme NP] order, unlike PDCs, as exemplified in (29).

(29) John gave someone every book. (some > every, *every > some)

This strange circumstance, called “scope freezing”, is also straightforwardly accountable within the object-raising analysis. The rigid scope in (29) shows the fact that the Goal NP *someone* is never in the domain of the Theme NP *every book*; thus, the Theme NP *every book* cannot take scope over the Goal NP. The Theme NP *every book* originally merges at the end of the structure; hence, there is no chance for the Theme NP to c-command the Goal NP, as depicted in (30).

(30) [_{VP} [_{NP} John] [_{v'} [_v] [_{AgroP} [_{Agro'} [_{Agro}] [_{VP} [_{NP} someone] [_{v'} [_v give] [_{NP} every book]]]]]]].

Agr^o prefers the Goal NP to raise to [_{spec-Agr^oP}] in DOCs within the object-raising analysis; further, the Theme NP is never attracted from its original position. In this consequence, the Theme NP is never out of a c-command domain of the Goal NP through derivations, as shown in (31).

(31) [_{VP} [_{NP} John] [_{v'} [_v] [_{AgroP} [_{NP} someone_i]_{[Agro'} [_{Agro}] [_{VP} [_{NP} *t_i*] [_{v'} [_v give] [_{NP}

every book]]]]]]].

This structural circumstance also causes scope freezing on DOCs.

In summary, the standard English ambiguity in a sentence is widely recognized as a consequence of a c-command relationship between quantifiers in terms of May's works. This section extends this legacy to resolve why PDCs show sentential ambiguity between the objects, but DOCs do not. The object-raising analysis clearly captures the c-command relationships among objects in both constructions. Specifically, both objects in PDCs are in a mutual c-command relationship through derivations; however, both objects in DOCs are in an asymmetrical c-command relationship. These differences provide the empirical outcome that (26) contains an ambiguity, but (29) does not.

3.3 Pseudo-Gapping

This section addresses how pseudo-gapping applies to DOCs and PDCs. In (32), we see a standard example of pseudo-gapping.

(32) John does not like rice, but he does ~~like~~ beans.¹¹

Since Jayaseelan's (1990) works on pseudo-gapping constructions, it has been widely recognized as one of the VP-Ellipses, rather than a single verb ellipsis. The remnant *beans* in (32) moves out of the VP, and this VP is eliminated. According to Jayaseelan, the remnants of pseudo-gapping move out of VP via Heavy NP Shift (HNPS)¹², meaning that the VP becomes a target of VP-Ellipsis. More recent works discuss what kind of movement(s) dislocate the remnant(s) of pseudo-gapping constructions out

Lasnik (1999), in contrast, proposes his analysis as an alternative to the standard HNPS analysis. He makes two critical arguments against the HNPS analysis. One of his counterexamples stems from the property of the indirect object in DOCs. Specifically, the indirect object in DOCs is never allowed any A'-movements, as shown in (33).

- In Jayaseelan's view, HNPS is responsible for remnant movement; hence, the HNPS of the Goal NP in DOCs as remnant must be prohibited, as indicated in (33d). However, this does not support the HNPS analysis, as examined in (34).

- (34) ?John gave Bill a lot of money, and Mary will give Sue a lot of money.

The other set of data, which is against the HNPS analysis, states that only a single pattern of pseudo-gapping is available in DOCs. Specifically, let us consider (35)-(37). First, the remnants are restricted to single constituents, but not to multiples.

- (35) *John gave Bill a lot of money, and Mary will give Sue a lot of advice.

Second, the Theme NP in DOCs cannot be a single remnant.

(36) ?*John gave Bill a lot of money, and Mary will ~~give~~ Bill a lot of advice.

(37) (=34) is only acceptable as a pseudo-gapping construction in DOCs, where the Goal NP is a remnant and the other elements, the verb and the Theme NP, are both eliminated.

(37) ?John gave Bill a lot of money, and Mary will ~~give~~ Sue ~~a lot of money~~.

Based on the above, it is difficult for the HNPS analysis to account for the grammatical distribution in (35)-(37). Alternatively, Lasnik (1999) proposes the A-movement analysis. Within Lasnik's analysis, each NP overtly rises to the closest [spec-AgrP] for Case reasons. He notes that the middle VP is the target of pseudo-gapping. Because these NP movements to each [spec-AgrP] are A-movements rather than A'-movements, (33) and (34) are resolved. Furthermore, the unexpected elements of pseudo-gapping in (35) and (36) are structurally eliminated, if it is assumed that the middle VP is eliminated after the higher NP rises to [spec-Agr^o P]. This is represented in (38) below.

(38) [_{VP1} [_{NP} Mary] [_{V'} [_{V1}] [_{AgrP2} [_{NP} Sue] [_{AgrP'} [_{Agr2}] [_{VP2} [_{NP} ~~*t*_i~~] [_{V'} [_{V2}] [_{AgrP3} [_{NP} ~~a lot of money~~]] [_{Agr'} [_{Agr3}] [_{VP3} [_{V'} [_{V3} ~~give~~] [_{NP} ~~*t*_j~~]]]]]]]]]]].

Lasnik also points out that PDCs display a similar behavior. In particular, pseudo-gapping with multiple remnants is prohibited.

(39) *John gave a lot of money to Bill, and Mary will **give** a lot of advice to Sue.

Moreover, the Goal PP as a remnant is prohibited.

(40) ?*John gave a lot of money to Bill, and Mary will ~~give a lot of money~~ to Sue.

In addition to DOCs, the Theme NP is allowed as a remnant in pseudo-gapping.

(41) ?I didn't give a lot of money to Bill, and Mary will **give** a lot of advice to Bill.

Based on Lasnik's view on PDCs, the Theme NP *a lot of advice* overtly raises to [spec-AgrP₂]. In addition, the Goal PP *to Bill* raises to [spec-AgrP₃]. After all requirements of movements of NPs are satisfied, VP-Ellipsis applies to VP₂ in the PF component. This is demonstrated in (42).

(42) [_{VP1} [_{NP} Mary] [_{V'} [_{V1}] [_{AgrP2} [_{NP} a lot of advice] [_{AgrP'} [_{Agr2}] [_{VP2} [_{NP} *t_i*] [_{V'} [_{V2}] [_{AgrP3} [_{PP} *to Bill*] [_{Agr'} [_{Agr3}] [_{VP3} [_{V'} [_{V3} **give**] [_{PP} *t_j*]]]]]]]]]]]]].

Following Lasnik's work, this section extends their statements in a much more economical way, enough to account for the data in Lasnik (1999). First, according to Lasnik's analysis, (38) and (42) contains two AgrPs and three VPs. According to the object-raising analysis, a single Agr^oP and VP-shells are sufficient to appropriately merge with each

argument in DOCs and PDCs. Let us first consider DOCs. In (43), the Goal NP *Sue* moves to [spec-Agr^oP] for Case reasons.

(43) [_{VP} [_{NP} Mary] [_{v'} [_v] [_{AgroP} [_{NP} Sue_i][_{Agro'} [_{Agro}] [_{VP} [_{NP} *t_i*] [_{v'} [_v give] [_{NP} a lot of money]]]]]]].

At this stage, if we suppose that pseudo-gapping is an ellipsis that eliminates the large/capital VP, the unexpected distinction in (35)-(37) is explicable. Specifically, the VP, which includes the verb *give* and the Theme NP *a lot of money*, is eliminated before head-movement of *give* applies, as depicted in (44).

(44) [_{VP} [_{NP} Mary] [_{v'} [_v] [_{AgroP} [_{NP} Sue_i][_{Agro'} [_{Agro}] [_{VP} [_{NP} *t_i*] [_{v'} [_v give] [_{NP} a lot of money]]]]]]].

As a result of (44), the acceptable example in (37), as repeated in (45), is generated without any problems, as the Goal NP *Sue* remains as a remnant after the verb *give* and the Theme NP *a lot of money* are eliminated.

(45) ?John gave Bill a lot of money, and Mary will give Sue a lot of money.

This is, however, structurally impossible for the unacceptable instances in (35) and (36). First, there is no constituent that include a verb *give* but not others. This grammatically excludes (35), as repeated in (46).

(46) *John gave Bill a lot of money, and Mary will give Sue a lot of advice.

Additionally, the verb *give* and the Goal NP *Sue* but not the Theme NP *a lot of advice* cannot form a constituent at any level of derivations, as in (43) and (44). Thus, (36), as repeated in (47), is excluded.

(47) ?*John gave Bill a lot of money, and Mary will ~~give~~ ~~Bill~~ a lot of advice.

In PDCs, Agr^o attracts the Case-less NP to $[\text{spec-Agr}^o\text{P}]$ based on the object-raising analysis. In PDCs, the Theme NP is responsible for this, as depicted in (48).

(48) $[_{VP} [_{NP} \text{Mary}] [_{v'} [_v] [_{Agr}^o\text{P} [_{NP} \text{a lot of advice}_i] [_{Agr}^o] [_{VP} [_{PP} \text{to Bill}] [_{v'} [_v \text{give}]] [_{NP} t_i]]]]]]]$.

Recall that pseudo-gapping applies to the VP before head movement of the verb *give* takes place. This is described in (49).

(49) $[_{VP} [_{NP} \text{Mary}] [_{v'} [_v] [_{Agr}^o\text{P} [_{NP} \text{a lot of advice}_i] [_{Agr}^o] [_{VP} [_{PP} \text{to Bill}]] [_{v'} [_v \text{give}]] [_{NP} t_i]]]]]]]$.

Consequently, the Theme NP *a lot of advice* is structurally licensed as a remnant in pseudo-gapping. This is clearly captured in (41) and repeated in (50).

(50) ?John gave a lot of money to Bill, and Mary will ~~give~~ a lot of advice ~~to Bill~~.

Furthermore, (49) successfully excludes the ungrammatical instances.

First, (51), which shows multiple remnants, is not allowed, as the Goal PP *to Sue* does not remain.

(51) *John gave a lot of money to Bill, and Mary will ~~give~~ a lot of advice to Sue.

Moreover, the Goal PP *to Sue* cannot be a single remnant, as in (40) and repeated in (52).

(52) ?*John gave a lot of money to Bill, and Mary will ~~give a lot of money~~ to Sue.

In summary, this article indicates that the standard HNPS analysis established by Jayaseelan (1990) involves some difficulties with regard to Lasnik's data. Note that the structures in (43) and (44) in DOCs and (48) and (49) in PDCs within the object-raising analysis capture the counterexamples found by Lasnik (1999) against the HNPS analysis, in that (i) a remnant movement is responsible for A-movement, and (ii) the inexplicable instances in (35)-(37) and (45)-(47) are clearly solved in terms of structural reasons. The gist is that the structures under the object-raising analysis are economically more adequate than (38), in light of the current fashion of syntax.

4. Summary and Direction for Further Research

Using an object-raising analysis, this article argues that overt object-raising to the functional specifier position, Agr^oP, takes place in both DOCs and PDCs. This analysis is supported by three empirical confirmations of

syntactic phenomena on DOCs and PDCs: backward anaphor binding (3.1), scope freezing (3.2), and pseudo-gapping (3.3). The gist of the discussions in this article is that all syntactical phenomena discussed in section 3 are forthrightly accounted for within the object-raising analysis, which assumes a single Agr^oP and the Larsonian VP-shells. This adheres to *the Principle of Parsimony*, a widely accepted principle in research, as defined in (53).

(53) *The Principle of Parsimony*

Entities should not be multiplied beyond necessity.

Within Minimalism, the object-raising analysis of DOCs and PDCs successfully captures at least three factors in this article, and it might be expanded to more data for the further research.

As is widely recognized, Postal (1974), Lasnik and Saito (1991), and Tanaka (1999), among others, developed a raising to object analysis while researching *believe*-type constructions. In future, I expect that the object-raising analysis will be an universal analysis in English. In particular, *spray*-type constructions are the next challenges in the object-raising analysis.

Notes

1. I would like to thank two anonymous reviewers of *Osaka Gakuin University Foreign Linguistic and Literary Studies* for comments and criticisms on various aspects of this article. I am responsible for all the remaining errors.
2. According to Barss and Lasnik (1986), not only an anaphor binding, but also a quantifier binding, weak crossover, superiority, and *each*...

the other expression, as well as negative polarity are discussed in detail. All these details indicate the conclusion that the Goal NP asymmetrically c-commands the Theme NP in DOCs.

3. This article does not address this theme in detail. See Kawakami (2018) for some empirical evidence that is strongly against the small clause analysis on DOCs.
4. A Theme argument is widely recognized as a bottomed item in a syntactic structure. See Wilkins (1988) and Takano (1998) for this discussion.
5. This structure is not without limitations. We must account for the mechanism of Case-checking of the Theme NP *a book*, as the Theme NP without Case causes a violation of *Case Filter*. One possible reason for this stems from the inheritance of some syntactic features from phase heads, which are the heads of CP and vP, according to *the Complete Functional Complex*. For instance, it might be true that a Case of the Theme NP in DOCs has been checked by an inherited Case feature from a phase head. More discussions on this topic are needed.
6. A preposition is recognized as one of the Case licensors (Chomsky 1981).
7. This is not acceptable if an anaphor stands alone, as exemplified in (1).

(1) *John introduced each other_i to Bill and Mary_i.

An anaphor needs to be inside certain phrases not to directly c-command the Goal PP, which causes a violation of *Condition C*.

8. A forward binding style of (15), of course, gives us a perfect grammaticality.

- (2) John introduced Bill and Mary_i to each other_i's friends.
9. There are some suggestions that a preposition does not disturb a binding domain of NPs.
- (3) John talked to Mary_i about herself_i.
- (4) John talked to Bill and Mary_i about each other_i.
10. There is also a suggestion that a preposition does not disturb a strong dominating.
- (5) John talked to someone about everyone.
- (some > every, every > some)
11. The strikeouts lines in this section describe the unpronounced materials.
12. Note that the HNPS moves the “heavy” NP (PP) to a sentential final position, as exemplified in (6).
- (6) a. John read [_{NP} the book that he bought last week] this morning.
 b. John read *t* this morning [_{NP} the book that he bought last week].

What makes NP “heavy” enough to move depends on the five factors, which are: complex of NP, separability of NP, relative weight of NP, early versus late attachment of NP, and new information that precedes old information. See Ross (1967) for more detailed distributions.

References

- Aoun, Joseph and Yen-hui, Andrey Li (1989) "Scope and Constituency," *Linguistic Inquiry* 20: 141-172.
- Barss, Andrew and Howard Lasnik (1986) "A Note on Anaphora and Double Objects," *Linguistic Inquiry* 17: 347-354.
- Baker, Mark C (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press, Chicago.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1992) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *MIT Occasional Papers in Linguistics* 1.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Fujita, Koji (1996) "Double Objects, Causatives, and Derivational Economy," *Linguistic Inquiry* 27: 146-173.
- Harley, Heidi (1995) *Subjects, Events and Licensing*, Doctoral dissertation, MIT.
- Harley, Heidi (2002) "Possession and the Double Object Construction," *Yearbook of Linguistic Variation* 2: 29-68.
- Harley, Heidi and Jung K Hyun (2015) "In Support of the P_{HAVE} Analysis of the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 46: 703-730.
- Horstein, Norbert (1995) *Logical Form: From GB to Minimalism*, Blackwell, Oxford.
- Jayaseelan, Karattuparambil A (1990) "Incomplete VP Deletion and Gapping," *Linguistic Analysis* 20: 64-81.
- Kayne, Richard (1984) *Connection and Binary Branching*, Foris, Dordrecht.
- Kawakami, Masahiro (2018) "Double Object Constructions; Against the Small Clause Analysis," *Journal of Humanities and Social Sciences*, Vol. 45: 209-226, Okayama University.

- Koizumi, Masatoshi (1993) "Object Agreement Phrases and the Split VP Hypothesis," In *Papers on Case and Agreement I: MIT Working Papers in Linguistics* 18, eds. Jonathan D. Bobaljik and Colin Phillips, 99-148. Department of Linguistics and Philosophy, MIT, Cambridge, Mass.
- Koizumi, Masatoshi (1995) *Phrase Structure in Minimalist Syntax*. Doctoral dissertation, MIT.
- Larson, Richard (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19: 335-391.
- Lasnik, Howard (1999) *Minimalist Analysis*, Blackwell, Oxford.
- Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1991) "On the Subject of Infinitives," In *CLS 27. Vol. 1, The General Session*, 324-343. Chicago, Ill.
- Marchant, Jason (1999) "E-type A'-traces under Sluicing," *Proceedings of the Seventeenth West Coast Conference on Formal Linguistics*, 478-492. CSLI Publications, Stanford.
- May, Robert (1985) *Logical Form*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Oba, Yukio (2005) "The Double Object Constructions and Thematization/Extraction," *Linguistic Analysis* 22: 56-81.
- Postal, Paul M (1974) *On Raising: One Rule of English Grammar and Its Theoretical Implications*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Ross, John Robert (1967) *Constraints on Variable Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.
- Takano, Yuji (1998) "Object Shift and Scrambling," *National Language and Linguistic Theory* 16: 817-889.
- Tanaka, Hidekazu (1992) "Raising to Object in English, French and Japanese," *English Linguistics* 9: 39-60.
- Tanaka, Hidekazu (1999) "Raised Objects and Superiority," *Linguistic Inquiry* 10: 317-325.
- Wilkins, Wendy (1988) "Thematic Structure and Reflexivization," *Syntax and Semantics* 21, Academic Press, New York.

二重目的語の構造的な洞察

川 上 将 広

英語において、単一の動詞に対し複数の目的語を持つ構文は (1) に示される二重目的語構文と (2) に示される与格構文が存在し、その統語的あるいは意味的な類似性から様々な分析が盛んに行われている。

(1) John gave Mary a book.

(2) John gave a book to Mary.

これらの統語構造に関して、Barss and Lasnik (1986) らに始まる先行研究では、一つ目の目的語（二重目的語構文では *Mary*、与格構文では *a book*）が二つ目の目的語（二重目的語構文では *a book*、与格構文では *to Mary*）よりも構造的に高い位置に存在し、この逆の関係はそれぞれの構文において成り立たない事が示されている。すなわち、一つ目の目的語が二つ目の目的語を非対称的に c 統御する統語構造をそれぞれの構文において仮定する必要があり、本稿の出発点はこの非対称的な統語構造の経験的妥当性にある。

第2節は、近年の極小理論に基づき、二重目的語構文、さらに与格構文のそれぞれに対する統語構造の提案を目的とする。本稿の構造的提案においては、Baker (1988) による「主題役付与一様性仮説」と Chomsky (1992) あるいは Koizumi (1993, 1995) で提案された機能範疇 “Agr^oP” を仮定する。また、これらの仮定に基づき、移動の条件に適した目的語が機能範疇 “Agr^oP” の指定部へ顕在的かつ義務的な移動をする目的語移動分析を主張し、この目的語移動

の要因としては、名詞の対格付与の義務性であることを示す。

第3節では、第2節で述べた主張の根拠として、二重目的語構文あるいは与格構文に観察される特異的な統語現象をそれぞれ取り上げる。後方的束縛現象 (3.1)、数量詞の作用域 (3.2)、さらに擬似空所化構文 (3.3) の3点による経験的なデータを例とし、本稿の分析がどのように統語構造内で適用されるかについて詳しく議論する。これらの議論から得られる帰結として、本稿の構造的提案が経験的な統語現象を統一的に説明可能であることを示し、この事実は極小理論あるいはオッカムの剃刀理論において、より経済的かつ経験的妥当な説明であることを主張する。

第4節では、本稿の議論をまとめ、筆者の今後の研究展望について述べる。Postal (1974) らの先行研究により、顕在的かつ義務的な目的語移動が *believe-type* 構文で広く分析されているように、他の構文においても顕在的あるいは義務的な目的語移動が適用されることが期待される。

大阪学院大学外国語学会会則

- 第1条 本会は大阪学院大学外国語学会と称する。
- 第2条 本会の事務所は大阪学院大学図書館内におく。
- 第3条 本会は本学の設立の趣旨にもとづいて、外国語学、外国文学の研究を通じて学界の発展に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は次の事業を行う。
1. 機関誌「大阪学院大学外国語論集」の発行
 2. 研究会、講演会および討論会の開催
 3. その他本会の目的を達成するために必要な事業
- 第5条 本会の会員は次の通りとする。
1. 大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部の専任教員で外国語学、外国文学を専攻し担当する者
 2. 本会の趣旨に賛同し、役員会の承認を得た者
- 第6条 会員は本会の機関誌その他の刊行物の配布を受けることができる。
- 第7条 本会には次の役員をおく。任期は2年とし、再選は2期までとする。
1. 会 長 1名
 2. 副 会 長 1名
 3. 庶務・編集委員 4名
- 第8条 会長は会員の中から選出し、総長が委嘱する。
副会長は会長が会員の中から委嘱する。
委員は会員の互選にもとづいて会長が委嘱する。
- 第9条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
副会長は会長を補佐する。役員は役員会を構成し、本会の企画・運営にあたる。
- 第10条 会長は役員会を招集して、その議長となる。
- 第11条 会長は会務執行に必要なとき、会員の中から実行委員を委嘱するこ

とがある。

第12条 総会は年1回これを開く。ただし、必要あるときは会長が臨時に招集することができる。

第13条 本会の経費は大阪学院大学からの交付金のほかに、有志からの寄付金その他の収入をもってあてる。

第14条 各学会の相互の連絡調整をはかるため「大阪学院大学学会連合」をおく。

本連合に関する規程は別に定める。

第15条 会計は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第16条 本会会則の改正は総会の議を経て総長の承認をうるものとする。

附 則

1. この会則は、昭和49年10月1日から施行する。
2. この会則は、平成3年4月1日から改正し施行する。
3. この会則は、平成13年4月1日から改正し施行する。
4. この会則は、平成24年4月1日から改正し施行する。
5. この会則は、平成25年4月1日から改正し施行する。

以上

大阪学院大学外国語論集投稿規程

1. 投稿論文（翻訳を含む）は外国語学、外国文学に関するもので未発表のものであること。
2. 投稿資格
 - イ. 投稿者は、原則として本会の会員に限る。
 - ロ. 会員外の投稿は役員会の承認を必要とする。
3. 原稿は次のように区分し、その順序にしたがって編集する。論説、研究ノート、翻訳、書評など。
4. 原稿用紙は、本学の200字詰用紙を横書きにし、枚数は原則として80枚を限度とする。

ワードプロセッサ使用の場合は、A4判用紙を使用し、1ページを35字×27行とし、16枚程度までとする。

和文フォントとして「MS 明朝」、欧文フォントとして「Century」を使用する。

外国語文の場合はA4判用紙を使用し、5,000語程度までとする。

原則として、論文本文が日本語文の場合は300語以内の外国語文の、また本文が外国語文の場合は900字以内の日本語文の、概要を付ける。

外国語による論文および概要は、投稿前に当該外国語母語話者によるチェックを受けることが望ましい。
5. 投稿論文の掲載の可否は、2名の査読者による査読結果に基づき編集委員会で判断する。
6. 発行は原則として、前期・後期の2回とし、6月・12月とする。年間ページ数は300ページ以内とする。
7. 抜刷は40部を無料進呈し、40部を超過希望の場合は編集委員会で超過費用を決定する。
8. 投稿され掲載された成果物の著作権は、著作者が保持する。

なお、出版権、頒布権については大学が保持するため、論文転載を希望する場合は、学会宛に転載許可願を提出願うこととする。
9. 投稿された論文の著作者は、当該論文を電子化により公開することについて、複製権および公衆送信権を大学に許諾したものとみなす。大学が、複製権および公衆送信権を第三者に委託した場合も同様とする。

この規程は、2020年4月1日から適用する。

以 上

大阪学院大学外国語論集執筆要領

1. 原稿は最終的な正本とする。校正の段階でページ替えとなる加筆をしない。
2. 欧文は1行あきにタイプすること。
3. 邦文原稿の挿入欧文は、タイプもしくは活字体で明瞭に書くこと。
4. できるだけ現代かなづかいと当用漢字を用い、難字使用の時は欄外に大書する。
5. 印刷字体やその他印刷上のスタイルについては、編集委員に一任する。
6. 注はまとめて本文の末尾に置くこと。

インデックス番号は上つきとして通しナンバーとする。その他の書式については、会員が所属する学外の学会の規程に準ずるものとする。(例えば、英文原稿の場合は、*MLA Hand book for Writers of Research Papers* に準拠すること。)

7. 図や表の必要の場合は別紙に書いて1枚ごとに番号と執筆者名を記入し、本文中の挿入箇所を指示すること。説明文は別紙にまとめる。
8. 自分でスミ入れして完成させた原図や写真の場合は厚手の台紙にはりつけて、希望の縮尺を記入すること。
9. 執筆者校正は2校までとし朱筆のこと。2校以前で校了してもよい。
10. 次の場合は、必要経費の一部が執筆者負担となることがあるのでとくに注意されたい。

ア. 校正のさい、内容に大きな変更は認められないが、やむをえず行って組換料が生じたとき。

イ. 特殊な印刷などによって通常の印刷費をひどく上まわる場合。

11. 原稿の提出期限は原則として9月末と3月末とする。
12. 原稿の提出先は編集委員あるいは図書館とする。
13. 原稿提出票を必ず添付する。原稿用紙と提出票は図書館事務室に申し入れる。

以 上

執筆者紹介（掲載順）

山 口 修 外国語学部 教 授

川 上 将 広 非常勤講師

編 集 後 記

新型コロナと隣り合っでの生活は間もなく2年になろうとしている。機械越しのやり取りがここまで一気に増えると誰が予想しただろうか。秋以降の感染者数の減少により、かなりの対面授業が再開されたとはいえ、メール、教育支援システム、Web 会議サービスなどを用いた授業や会議はすっかり日常の一部となっている。

本来、言語は生の声が届く範囲で伝えられるものであった。相手を目の前にしてのやり取りでは、ことばの内容以外にさまざまな情報がとびこんでくる。年齢、性別、表情、声の調子、身振り、髪型、服装、持ち物などなど。言語に付随して我々の理解を支えてくれていたこれらの情報の多くが機械越しのやり取りではそぎ落とされる。第6波は来ると予測する専門家は多い。当分おさまりにくいコロナ禍において、失われたものを少しでも補うために何ができるのか、試行錯誤が続く。

授業にも研究にもこれまでと異なる対応が求められる難しい状況のなか、第82号刊行のはこびとなった。執筆者に心から感謝申し上げる。 (F. S.)

大阪学院大学外国語学会役員

会 長 山 口 修

副 会 長 吉 村 京 子

編集・庶務委員 川本裕未・笹間史子・中田辰也・平松良康

大阪学院大学外国語論集 第82号

2021年12月20日 印刷 編集発行所 大阪学院大学外国語学会

2021年12月31日 発行 〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号

電話 (06) 6381-8434 (代)

発行人 山 口 修

印刷所 大 枝 印 刷 株 式 会 社

吹 田 市 元 町 28 番 7 号

電話 (06) 6381-3395 (代)

OSAKA GAKUIN UNIVERSITY

FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES

No. 82

A Study of Frank Chin's *Donald Duk*: A Process of Acquiring
Donald's New Identity Osamu Yamaguchi 1

Remarks on Double Objects – a Syntactic Insight
..... Masahiro Kawakami 25

December 2021

THE FOREIGN LANGUAGE SOCIETY
OSAKA GAKUIN UNIVERSITY